

複式学級「金沢の伝統工芸 金沢漆器の魅力に迫る」

岡本 光司

(1) 1学期の取組

今年度の複式学級における総合的な学習の時間は、金沢の伝統工芸である金沢漆器を題材として学習を進めていく。株式会社能作（金沢市広坂）の岡能之社長と継続的に学習を進めることで、実社会での金沢漆器を取り巻く環境について学び、課題解決学習を進めていく。

金沢漆器は現代において、生活実用品としての需要が減少している。要因として、食器洗浄機の普及、年中行事の簡略化など、生活様式の変化が考えられる。どれも時代の変化に起因するもので、すぐに解決できる課題ではない。そのような現状だからこそ、子ども一人一人が題材への強い思い入れをもつことで、危機感をもって、課題解決に向けた探究的な学びを進める中で、9つの資質・能力の育成ができると考えた。

1学期は、子どもが金沢漆器について興味・関心を高め、題材への愛着をもたせるために、見学、体験活動をくり返し行った。初めての題材との出会いの場面では、教室で金沢漆器のお重箱をじっくりと鑑賞する時間を設けた(資料1)。はじめて見る金沢漆器を目の前に、子どもからは、「なんだか金きらですごい」「ものすごく(価格が)高そう」という、見た目のインパクトについての感想が多く聞かれた。

次に、能作の店舗へのお見学では、金沢漆器を輪島塗や山中漆器などに見比べて、特徴や技法についてさらに深く学んだ(資料2)。この段階では、子どもは、「歴史のある工芸品なんだな」「漆を塗ったり、木地を加工したり、いろんな工程があるんだな」と、金沢漆器について、少しずつ知識を身に付けており、見学のふりかえりでは、「もっと細かな作り方を知りたい」「作っているところを見学したい」という意見があった。

そして1学期の学習の最後には、加賀蒔絵の絵付け体験を親子活動として行った(資料3)。保護者とともに、自分の考えた配色で銘々皿を作成することで、これまで学習してきた「下絵」「漆付」「粉付」などの知識についての理解をより一層深めることができた。そして、学習のふりかえりでは、実際に経験したからこそその視点の深化が見られた。「実際にやってみると、細かな作業がとても難しかった。能作に会った蒔絵なんて絶対作れない」「職人さんの技術がとっても高いことが分かった。実際の作業を見たい」「人間業とは思えない。ロボットでやっているんじゃないかな」など、金沢漆器に施される加賀蒔絵についての関心がさらに高まった。



資料1 金沢漆器との出会い



資料2 能作での岡社長の説明



資料3 加賀蒔絵の体験学習

ここまでの学習の中で、子どもの金沢漆器への関心が、表面的な見た目から、技法や歴史、製作工程へと変化していった。1学期の学習をまとめる授業では、「初めて漆器を見たときは、派手で豪華としか思わなかったけれど、体験や見学を開いた今は、金沢漆器の素晴らしさをもっと理解できる」と、自己の変容を実感している子どもの発言を全体に共有し、これまでの学習の価値づけを行った（資料4）。



資料4 1学期の学習をまとめた授業の板書

探究学習の序盤に、題材の魅力に十分に触れることで、2学期以降の学習で課題に直面した際に、粘り強く課題解決に向けて試行錯誤し続ける「挑戦心」の重要な土台となる興味・関心、題材への愛着を醸成することができたと考える。

(2) 2学期の取組

2学期は、社会的課題を、自分はどう解決したいかと方向性を決めるため、一人一人が課題設定を行うための学習を行った。

はじめに、1学期最後の学習で、子どもが希望した職人さんの工房の見学をした（資料5）。そこで、実際に職人さんが様々な技法で蒔絵を仕上げている姿を目の当たりにし、金沢漆器の特徴でもある多彩な表現技法が、職人の技術に支えられていることを学び、地元で優れた工芸品があることを誇りに感じる子どももいた。



資料5 工房の見学

さらに、1学期に行った蒔絵体験で作った銘々皿を使って、岡社長にお茶を淹れていただき、茶道体験を行った（資料6）。茶室での特別な時間、空間での体験のなかで、「器が違うだけで、上生菓子がいつもより美味しく感じた」「金沢漆器は、きれいな模様を見るだけじゃなくて、使うことも楽しみ方のひとつなんだな」と、金沢漆器の魅力の新たな側面を体験した。



資料6 茶道体験

課題提示のタイミングについては、事前にゲストティーチャーと入念にうち合わせを行い、共通理解を図って提示した。十分に金沢漆器の魅力を知ったこのタイミングで、職人さん、岡社長から、金沢漆器の抱える課題について語ってもらった。生活様式の変化による漆器の需要減少、職人の後継者不足、金の価格高騰など、金沢漆器の現状を聞き、危機感を感じる

子どももいた。一方で、課題とされる場面が生活体験とかけ離れていて、実感がわからない子どもの様子も見られた。このまま課題設定に進んでも、自身の切実感のある課題にならず、難しい場面に直面したときに、粘り強く試行錯誤できずに学習が停滞してしまうと考えた。

そこで、より自分の生活と関係のある課題であることを実感できるよう、身の回りの大人に金沢漆器についてのアンケートをとった。すると自分の親も、学校の職員も、教育実習生も、ほとんどの大人が金沢漆器のことを知らない（学習前まで知らなかった）という実態が浮き彫りとなった。

金沢漆器の魅力と課題の両方を学んだことで、子どもは、「自分たちが感じている金沢漆器の魅力を、多くの人に伝えたい。そうすることで、金沢漆器を守っていきたい」という願いを強くもった状態となった。そこで、これまで学んだ魅力を「知る楽しさ」「使う楽しさ」「作る楽しさ」「見る楽しさ」に分類し、自分がどの楽しさを誰に伝えたいのかという願いを一人一人が設定し、個別に探究学習を開始した。

このように、社会的課題をゲストティーチャーから提示するタイミングと、自分事として捉えるためのアンケートの手だてにより、より強い課題意識をもって、子どもが個別に「課題を発見する力」を発揮することが出来た。子どもはグループまたは一人でプロジェクトを立ち上げた。

これ以降は、個別の探究課題を設定し、プロジェクトの実行に向けて学習を自分でデザインしながら進めた。そのために、自分の学ぶ姿をふり返り、自己評価を継続していった。

総合の時間に個別探究学習ができるよう、1学期から算数科で自由進度学習に取り組んできた。自己の学びをふり返り、次時の学びの姿を自己調整する活動をくり返すことで、総合の学習においても、「今日はアイデアを出すために、友達と相談しよう」「今日は企画に向けて、個人作業をしよう」と自分の学習形態を選択しながら学習を進めた（資料7）。



資料7 個人またはグループで、自由に学習形態を選択して活動する様子

また、ふりかえりをスズキ教育ソフトの教育クラウドサービス edu-cube 内の「トラビ」でAI解析することで、全体の傾向と自分の実態を比較して、学び方を選択する一助とする姿も見られた。これらの自己評価、自己調整のくり返しの中で、自分自身の状態を「評価する力」を育成することができた。

一方で、トラビによる継続評価をいかして、自己の変容を自覚するような手だては、十分に行うことが出来なかった。自分の学び方の変容が可視化できるような質問項目や評価の観点を事前に吟味し、子どもと共有することで、自己調整による学び方の改善を自覚し、さらに課題解決に向けての挑戦心が向上したのではないかと感じた。

（3）今後の展望

子どもの個別のプロジェクトの中には、外部と連携しながら、中長期的な計画で実行する必要があるものと、学校内で完結して実行できるものと様々である。今後は、実行可能なプロジェクトから順に実現

させていく。その際に、プロジェクトメンバーだけで人手が足りない場合は、クラス全体でサポートをして実行していく。その際には、これまでの学習で重点的に育成してきた「挑戦心」「課題を発見する力」「評価する力」を働かせながら、計画が思い通りにいかない場面で、子どもがどのように学習を進めていくかを個別に支援していく。

2学期の時点で、「金沢漆器クイズラリー」を学校内で実行することが出来た。学校内に問題を掲示し、全校児童を対象にクイズラリーを行った(資料8)。

参加した子どもからのアンケートには、「金沢漆器について興味がわいた」という記述が多く、企画した子どもは大きな達成感を得て、サポートした他の子どもは、「自分のプロジェクトもこんなふう成功させたい」という意欲につながっていた。一方で、肯定的なふりかえりだけでなく、「問題の意味が分かりにくかった」「低学年には難しい言葉だった」など、改善点についてもまとめる活動を全体授業で行った。相手にとって価値のある企画、活動になっていたかを評価するために、参加者のアンケートが指標になることを確認した。



資料8 スタンプラリーと活動の様子

今後は、各プロジェクトの商品開発と、金沢駅での蒔絵体験イベントの実現に向けて学習を進めていく。実社会での課題解決学習においては、当初に自分が思い描いていた形をそのまま実現することは難しいことが予想される。

例えば、金沢漆器のトランプを作りたいという商品開発のアイデアをもった子どもがいるが、岡社長からは、「カードゲームのアイデアは面白いが、トランプでは金沢漆器の魅力が伝わらない」というように、試行錯誤のヒントを残すような回答をしていただいた。ここから、「金沢漆器を遊んで楽しみながら知れる商品を作りたい」という願いの実現に向け、粘り強く試行錯誤できるよう、必要なタイミングでのサポートするために、自由進度学習のなかでも、子どもの実態を教師が把握する必要がある。

「金沢漆器の楽しさを伝えたい」という大きな目標の実現に向けて、金銭的条件や相手のニーズによって臨機応変に計画を練り直しながら、粘り強く学習を進めていけるよう、個々のニーズに合った支援を適切なタイミングで行うことが重要であると考えている。